第54回関西学院史研究会（二〇二二・一二・九）

戦前の関西学院から世界の楽壇へ
―いま蘇る天才作曲家 大澤壽人（一九〇六―五三）の煌きの軌跡―

生島美紀子氏（大澤資料プロジェクト代表）

司会　ただいまより第54回の関西学院史研究会を始めたいと思います。皆様、お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。私は、関西学院史編纂室の室長を務めております田中敦と申します。本日は司会をさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

本日は関西学院出身の作曲家である大澤壽人先生についての講演を神戸女学院大学の生島先生にお願いをしております。また、本日この場に大澤先生のご長男とその奥様がお越しになっておられますので、ご紹介させていただきます。大澤壽文様と佐智子様です。どうも本日はありがとうございます。

それでは、私から生島先生についてご紹介したいと思います。生島先生はスタンフォード大学にて音楽学で日本人初の修士号を取得され、大阪大学で博士号を取得されました。二〇〇六年より「大澤壽人遺作コレクション」の担当教員として、ご家族より提供いただきました大澤先生の自筆楽譜など遺品約三万点の調査をされてこられました。編纂した目録『煌きの軌跡Ⅰ』では「二〇〇八年度音楽クリティック・クラブ特別賞」を受賞されました。二〇〇九年に「大澤資料プロジェクト」を立ち上げられ、作品展主催や演奏会、講演会などを通して、大澤先生の音楽の普及活動にあたっておられます。前に置いてあります一番分厚い

本が『天才作曲家大澤壽人』というみすず書房から出版された本でございまして、二〇一七年に朝日新聞書評委員による「今年の三点」に選ばれております。また、二〇二〇年から二〇二一年にかけて、民音音楽博物館において開催された「大澤壽人展」を監修されました。現在は、大澤資料プロジェクト代表であり、神戸女学院大学非常勤講師を今も続けられて教鞭を執っておられます。本日はその大澤先生についてお話しいただき、また音源もいろいろご用意いただいておりますので、そちらもお楽しみいただきながらいろいろ学びたいと思います。では、生島先生、どうぞよろしくお願いいたします。

＊　＊　＊　＊　＊

皆さま、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました生島でございます。どうぞよろしくお願いいたします。恐縮ですが、ここから座ってお話しさせていただきます。

今日は大澤壽人という、関西学院出身で明治生まれの天才作曲家の話をいたします。戦前に留学してボストン・パリで大成功。帰国して戦中戦後も大活躍しました。しかし若くして亡くなったため長らく忘れられた存在でしたが、奇跡的に復活し今、再び脚光を浴びています。

詳しい話に入る前に本日の労をお執りくださいました田中敦先生、池田裕子様、高橋和三様はじめ、学院史編纂室の皆さまに御礼申し上げます。大澤先生の母校でお話しさせていただきますこと、大変光栄でございます。

では、始めます。アシスタントは松尾璃奈（りな）さんです。

大澤家は先生が一九五三年、昭和二八年に四七歳の若さで急逝されたのち、全ての遺品をお蔵に入れて守ってこられました。ご長男の壽文さんは先生が亡くなられた時、小学校六年生でしたが、言いつけに従って半世紀以上も保管されました。そして二〇〇六年、平成一八年に神戸女学院にご寄贈くださいました。「大澤壽人遺作コレクション」と名付けられ、総数三万点、宝の山です。

それは段ボール四三箱分もの量で、自筆の楽譜が一万枚以上。コンサートのポスターやプログラム、日記や写真、指揮棒まで含まれ、教育機関が有する一作曲家のコレクションとして日本最大です。

女学院は資料室と図書館の協力のもとに特別チームを編成し、学術調査と目録作成を始めました。一七年前のことです。私はその陣頭指揮をして、教え子たちとともに調査をしました。ともかく三万点は膨大な量で、当時は毎日

一〇時間ぐらいパソコンの作業をして老眼が進みましたが、五年の間に二冊の作品目録を完成し、学校から刊行しました。『煌きの軌跡Ⅰ・Ⅱ』といいます。手前のテーブルに置いておりますので、よろしければ後ほどご覧くださいませ。

青の『Ⅰ』は楽譜情報のみを掲載して、「音楽クリティック・クラブ特別賞」を受賞。赤の『Ⅱ』はさらに進めて、三万点全ての情報を網羅的に記しました。この二冊によって、それまで知られていなかった先生の活動の全貌が、明らかになりました。例えば、作品数は寄贈前に七〇くらいと思われていたのですが、実は千近くもありました。ほぼゼロから始め、今は全貌を把握し、こうして皆さまにお話しできるようになったわけです。幻のベールが取り払われ、日本の洋楽史に天才がいたと再評価が高まっていきます。

そして、さらに分かってきた驚きの事実がたくさんありました。戦前の日本がまだ「洋楽の作曲家って何？」という時代に、留学先でオーケストラの大作をどんどん書いて脚光を浴びた。ボストン交響楽団を日本人として初めて指揮したなど、邦人初の業績が数多い。パリでも考えられないほどの成功を収めた。帰国後の戦中、戦後はラジオや映画音楽まで手掛け、時代の寵児として活躍。音楽の世界の大スターだったことが分かりました。

こうするうちに、世界に羽ばたいた天才のことを世に伝えなくてはならないと研究者の使命を感じ、二〇一七年に評伝を出版いたしました。その執筆のために、学院史編纂室には何度も伺って調査を進めました。という次第で、井上琢智先生が室長でいらした時からご縁をいただいております。

では、「大澤コレクション」の写真をスライドでお見せしながら、生涯と作品をご紹介します。恐縮ですが、ここから先生を大澤と呼んでお話しいたします。

大澤は一九〇六年、明治三九年生まれで今年は生誕一一六年です。同世代の方は流行歌で知られる古賀政男さんや古関裕而さん、指揮者の朝比奈隆さんがおられます。

生涯を要約すると三つのポイントがあります。第一に、わずか四七年の生涯でした。第二に、日本の洋楽作曲界の黎明期に海外で超一流と評価されました。第三に、作曲した期間は実質二三年だったにも関わらず、千近くの作品を遺すという圧倒的な創作力を持つ作曲家でした。

その創作を四つの時期に分けて見ます。オレンジの「第一期」は、生まれてから関西学院を卒業する二三歳まで。赤の「第二期」は、二四歳からボストン・パリへの留学、

足かけ六年です。ブルーの「第三期」は、二九歳で帰国して戦中の九年。淡い緑の「第四期」は、三九歳で迎えた終戦から亡くなるまでの戦後の八年です。

「第一期」に入ります。生誕から留学までの二三年間です。これは父の壽太郎と母のトミで、二人は愛媛県新居浜市の出身。父は神戸製鋼所の創業に関わった技術者で、謡が趣味でした。大澤は今の神戸市中央区脇浜町で生まれました。トミがクリスチャンだったので、連れられて幼い頃から日曜学校に通いました。大澤にとって初の西洋音楽体験は、賛美歌とオルガンです。

一九二〇年、大正九年に関西学院中学部に入学し、グリークラブに入ります。山田耕筰先生が同じクラブでしたから、二〇年後輩にあたります。学校では神学部の先輩から感化を受けました。後に学院の宗教主事になられる柳沢正義先生と、合唱で有名な津川主一先生は約一〇歳年上。お二人とも大澤家と家族ぐるみで親しいご関係でした。

当時の洋風文化も大澤を育みました。現在は「阪神間モダニズム」と言われます。港町神戸には在留外国人が多く、ロシア人のルーチンにピアノを習いました。ルーチンのピアノ塾は三宮のトアロードにありました。彼は夏になると深江文化村と呼ばれる貸別荘で過ごしたので、大澤はレッスンに通いました。

ピアノを習った外国人はもう一人いて、スペイン人のヴィラヴェルディです。須磨に住んでいました。原智恵子さんという、日本人として初めてショパン・コンクールに参加したピアニストがおられますが、この方もヴィラヴェルディの門下でした。

大澤のピアノは上達して、演奏会ではソリストを務めました。一九二九年、昭和四年に関西学院オーケストラクラブが、関西の学生オケとして初めてモーツアルトの《ピアノ協奏曲第二〇番》を全曲演奏した時、独奏は大澤でした。

一九歳の時に大澤にとって大事件が起こります。フランスからピアニストのジル＝マルシェックスが初来日しました。彼は画家のマティスのモデルになるような華やかな演奏家で、招聘したのは大富豪の薩摩治郎八でした。

ジル＝マルシェックスは日本各地を演奏旅行します。神戸にも来てリサイタルを開き、その時に会場になったのが関西学院の中央講堂でした。なぜ関学に来たかと言えば、まだ専用の音楽ホールがない時代だったからです。中央講堂にはスタインウェイのピアノがあり、座席数は一六〇〇もありました。そのため音楽ホールの役割も地域の公民館の役割も担う、人々に開かれた場所でした。

大澤は母校でジル＝マルシェックスのピアノを聴きます。芸術の都パリからはるばるやってきた彼の演奏に感動して、作曲家になりたいと願うようになりました。ところが、日本には作曲を専門に学ぶ学校がまだありません。それで、高等商業学部を卒業した年に留学することになりました。この頃の大澤はご覧のように、眉目秀麗の若者です。

もう一枚、大澤家のごきょうだいです。左から三番目、弟の壽邦さんも関学のご出身でラグビーをなさっていました。左から二番目、末の妹の杉子さんは女学院です。同級生には、のちに朝日放送の会長になられる原清さんがおられます。戦後の大澤が、朝日放送ラジオの開局時から音楽を担当するのはこの関係です。

大澤はキリスト教の活動に熱心でした。学院内にあったハミル日曜学校の教師を務め、関西学院教会のオルガニストでした。留学が決まった時、後任のオルガニストになったのは後輩の日野原重明先生でした。

「第二期」に入ります。ボストン・パリでの足掛け六年です。確認しますと、これが当時、神戸一の繁華街であった新開地で、活動写真館や芝居小屋が建ち並んでいます。耳にするのは琴や三味線が多かったこうした時代に、西洋音楽の作曲家になりたいと海外を目指したわけです。

一九三〇年、昭和五年に二四歳でアメリカを目指します。左が大澤、右が父で、横浜港から日本郵船の太洋丸に乗って出発。ハワイのホノルル港まで一〇日もかかって入国しました。

ボストンを選んだのは、関西学院の先生方のご指導でした。左のベーツ先生が、ボストン大学のスミス先生と親しかった。右の那須生平先生は、ご親戚がボストンにあるニュー・イングランド音楽院に留学経験があったのでお勧めになりました。

一九三〇年九月、ボストン大学に入学。念願だった作曲を正式に学び始めました。当時のノートを調べると、寝る間を惜しんで猛勉強しています。一方で、私費の留学は限られた時代ですから、海外では華やかな場もありました。高松宮殿下ご夫妻がボストンにいらした時は、御前演奏をしています。

一九三二年にはボストン大と並行して、ニュー・イングランド音楽院にも入学しました。この音楽院のホールは美しく、アメリカの歴史的建造物に指定されています。大澤がコンサートに通い、自作の発表も行った大切な場所です。同院でコンヴァースに師事した頃から才能が花開きます。彼はアメリカ人として初のオペラを作曲し、ボストンの名

士として知られていました。

ここで大澤が留学した一九三〇年代の西洋音楽についてお話ししますと、ドミソのように心地よい和音を中心とする調性音楽が終わり、不協和な和音が当たり前の無調の時代に入っていました。そうした不協和音による新しい作品、同時代の作品を現代音楽と呼びますが、ボストンでは現代音楽がよく演奏され、世界的に見ても音楽先端都市でした。この大都市で、大澤はボストン交響楽団の定期演奏会の会員になります。現代音楽を浴びるように聴いて影響を受けました。

その結果は、西洋の最新の作曲法を完璧に身に付けてモダンです。周りにはさらに先を目指すウルトラモダンな作曲家たちがいましたから、感化を受けて「ウルトラ・モダニスト」に成長しました。

他方、大澤は明治生まれです。幼い頃に聞いた琴や三味線や父の謡曲など、日本的な音感があります。それは日本の心、和魂と言えましょう。大澤は日本の心を持ち、西洋の才知で磨かれた「和魂洋才」の作曲家として注目を集めるようになります。ボストン響の大指揮者、クーセヴィツキーが大澤の実力を評価しました。

では、和魂洋才が端的に表れている作品をまずご紹介します。クーセヴィツキーに捧げられた《コントラバス協奏曲》から第二楽章〈モノローグ〉です。西洋の楽器を使っているのに、能の舞台のような雰囲気が漂います。そしてコントラバスの音がずり上がったり、ずり下がったりするように聞こえるのは、「四分音（しぶんおん）」という当時最新の作曲法の一つで、半音より狭い微細な音程を使っています。では、和と洋の素晴しい融合をお聴きください。

【コントラバス協奏曲から 第二楽章モノローグ】

いかがでしたでしょうか。数多い作品の中で独創的という意味では一番と思いまして、まず聴いていただきました。九〇年前の作品ですが、前衛的で驚かれたのではないでしょうか。

一九三三年、昭和八年にボストン大学四年の課程を三年で終えて卒業しました。卒業作品の《ピアノ協奏曲》は日本人による最初期の協奏曲です。急成長が続きます。卒業式の晩にはボストン響を指揮して、自作《小交響曲》を披露しました。「日本人初」という快挙です。小澤征爾さんが音楽監督になる何と四〇年も前の出来事でした。

すでに大澤は、現地で脚光を浴びる若手作曲家でした。

日本の作曲界はまだ黎明期と言えますから、この時代にアジアからの一留学生が、世界で超一流のボストン響を相手に自作自演した意義は計り知れません。

では、ボストン時代の最後を締めくくる《交響曲一番》の冒頭を聴きます。大澤は創作への意欲があふれ出ていて、この旺盛な創作力は生涯にわたりました。戦前に邦人が作曲した最大規模の交響曲です。スコア一八七頁、演奏時間五〇分、堂々たる作品で、コンヴァース先生に捧げられました。

【交響曲一番から 第一楽章】

一九三四年、昭和九年にフランスに渡り、パリのエコール・ノルマル音楽院でデュカの作曲クラスに入ります。ブーランジェのレッスンもプライベートで受けました。世界に名だたる作曲家たちに、自分の実力を示したいと考えたからです。

一九三五年、昭和一〇年に人生のハイライトというべき日が訪れます。コンセール・パドゥルー管弦楽団を自ら指揮して大作を発表。パリで作曲家・指揮者としてデビューした初の日本人となりました。

会場はサル・ガヴォー、現在もある立派なホールです。当日は「フランス六人組」のオネゲルやミヨーなど、西洋音楽史の教科書に載るような大作曲家たちが聴きにきて、それは煌めくような新作コンサートでした。

発表した作品は《交響曲第二番》や《ピアノ協奏曲第二番》などで、ピアノを弾いたのはジル＝マルシェックス。大澤が母校で聴いて感動した、あのピアニストです。オーケストラ伴奏による歌曲《桜に寄す》も発表されました。この作品には私たちになじみの《さくらさくら》が引用されていて、初演はクレンコ。ローマ字で覚えて日本語で歌いました。これは彼女の家に大澤が練習に行った時のスナップです。

パリ・デビューは絶賛を博しました。大作曲家のイベールが書いた演奏会評です。こうして本場で実力を評価され、邦人の枠を超えた華麗で国際的なキャリアを築きました。

では、これまでのまとめをかねて《桜に寄す》を聴きましょう。桜の季節に女学院で撮影された映像です。

【桜に寄す】

パリ公演を大成功で終えまして、帰国後の「第三期」に

入ります。一九三六年、昭和一一年に二九歳で帰国して、まず東京で帰朝演奏会を開きました。プログラムは半年前にパリで大成功した演奏会の再演です。それから大阪でも開きました。それは大成功を手土産にした、凱旋のような演奏会のはずでした。

ところが予想に反して厳しい批評を浴びました。理由は二つ考えられます。一つは、当時の日本が大澤の最先端を行く作風についていけなかった。評論家も聴衆も音楽が理解できないと「作品が未熟だから」とした。もう一つは、時代です。日本は日中戦争の前夜でした。大阪での演奏会は、留学の成果を聴かせるために英語・仏語・日本語による歌曲を披露したのですが、不穏な社会が「三カ国語の歌とは何ごとか」と的外れな批判をしました。

とにかく今のようにSNSが発達しているわけではないので、海外での成功もリアルタイムで伝わっておらず、評価が追いつかない状況でした。傍らで神戸女学院の教壇に立ちました。女学院は大澤が教えた唯一の学校です。

帰国翌年、ジル＝マルシェックスが来日します。思い返せば初来日の時、大澤が彼の演奏に感動して作曲を志した。二人はパリで再会し、彼が大澤の《ピアノ協奏曲第二番》を初演した。今度は東京で大澤のコンサートに飛び入りで出演します。それから神戸に来て、相生橋の海員会館でリサイタルを開き、大澤の新曲を初演しました。

この作品を聴いてみましょう。《丁丑春三題》と言います。聞き慣れない丁丑とは作曲された一九三七年、昭和一二年を指します。「丁」は十干の丁、「丑」は十二支の丑にあたります。三曲からできていますが、第一曲の〈春宵紅梅〉をお聴きください。梅の香る、美しい早春の作品です。ドビュッシーを思い出されるかもしれません。

【丁丑春三題から 春宵紅梅】

この頃に大澤は寄稿記事の中で、自分が尊敬し、影響を受けた作曲家を三人挙げています。一人がドビュッシー、それからストラヴィンスキー、そしてシェーンベルクでした。今の作品はまさしくドビュッシーの日本版のような、美しい曲だったと思います。

帰国から三年目に《ピアノ協奏曲第三番 神風協奏曲》が完成しました。神風とは特攻隊ではなく、朝日新聞社の所有飛行機の神風号のことです。当時の世界最速記録を打ち立て、日本中が沸いて話題になりました。それにちなんで作曲された作品です。今聴いても斬新な響きに驚かれる

と思います。

【ピアノ協奏曲第三番 神風協奏曲から 第一楽章】

先ほどのピアノ音楽とは全くタイプの違う、ダイナミックな音楽だったと思います。令和四年の今から八四年前に作曲されたとは思えません。時を超える音楽の力というか、大澤の才能を感じさせます。

この作品によって、忘れられた大澤に平成一六年の復活劇が起こりました。今ではこのCDを聴いて大澤ファンになる方が多いです。昨年はNHK-Eテレ「クラシック音楽館」から放映されて評判でしたが、当時は散々でした。というのは、日中戦争から日独伊三国同盟に向かう時代ですから「音楽どころではない」という状況です。一方で、戦時下の音楽には国民を鼓舞する役割が求められていました。

でも、幸せなこともありました。宝塚歌劇団に所属する声楽専科の月瀬梅香（つきがせうめか）を見初めました。間に入られたのは、やはり関西学院出身の高木史郎さんと伺っております。結婚式を挙げたのは、西の帝国ホテルと呼ばれた甲子園ホテルです。

翌年、長男の壽文さんが生まれた時に、日本は太平洋戦争に突入しました。音楽に規制がかかり、外国のものは禁止されます。国威発揚を目指して、作曲も指揮も日本人によるものが求められました。コンサートを開くことが困難になって、ラジオが音楽家たちの仕事の場になった時代でもありました。

ではJOBK、NHK大阪ラジオ放送局から一九四一年、昭和一六年に放送された《たぬき》を聴きます。ダイナミックな交響曲や協奏曲を得意とした大澤に、こんな楽しい作品があるのかと驚かれることでしょう。遺品の山から私たちが発掘して、数年前に七七年ぶりの復活演奏が実現しました。

秋祭りの前夜に、たぬきたちが集まって腹つづみの稽古をしています。そこへ指導役の分福先生が登場して、若かりし頃の自慢話を始めるという場面です。皆さまご存知の、分福茶釜の物語が始まるところを聴きましょう。二〇一八年神戸市混声合唱団「春の定期演奏会」におけるピアノ伴奏版世界初演の実況録音です。

【たぬき】

いかがでしたでしょうか。これだけ聴いておりますと楽しくて、今ミュージカルとして再現しても面白いような作品ですが、外では戦禍の厳しい時です。日本人による国威発揚のための作品という背景を知ると、そのギャップに胸が痛くなる思いがいたします。

作品としては、文福役のテノールソロにオペラ風のアリア風に歌うとか、浪曲風に歌うとか指示が細かく、また最後はワルツの大合唱で終わります。大澤の作曲の技術とユーモアのセンスなど、いろいろなものが全部流れこんでいて、大変興味深いと思います。

「第四期」です。ようやく終戦を迎えました。前列の坊やが壽文さんです。制約が緩和されて仕事ができる時代になり、いろいろなジャンルで作曲します。トヨタのコマーシャルソングも作りました。作曲するのは夜中が多く、壽文さんは「家の中ではいつもピアノの音がしていた」とおっしゃっています。

戦後の大澤は、敗戦からの復興を目指して「音楽による心の復興」を掲げ、親しみやすく質の良い「中間層の音楽」を創ることに専念しました。そのため戦後は作風が全く異なります。進駐軍がもたらしたジャズを取り入れた協奏曲が6曲もあります。その中から日本初の《トランペット協奏曲》をお聴きください。

【トランペット協奏曲から 第二楽章】

他のジャンルでは、生涯に約四〇本の映画音楽を手掛けています。そのうちの何本かはＤＶＤで観ることができます。

また一九五一年、昭和二六年に民間最初期の朝日放送ラジオが開局すると、専属の作曲家・指揮者になりました。初めにお話ししたように、幼い頃から関西学院へとずっと同級生だった原清さんとのご縁です。

朝日放送では「ホームソング」などのレギュラー番組を持ち、毎週々々新しい歌を書いていきました。一つの歌に、独唱・合唱・ピアノ伴奏・オーケストラ伴奏と四種類創ったので、仕事量の多さをご想像いただけると思います。

録音が遺っておりますのでお聴きください。関西学院の先輩、竹中郁先生の詩による《猫の子あげますいらっしゃい》です。今日、聴いていただいた中で、これだけが当時のオリジナル音源です。大澤自身の指揮によってＡＢＣ管

弦楽団が演奏し、歌っているのは女学院の教え子、小松周子さんです。

【猫の子あげますいらっしゃい】

スイングする「猫の子あげますいらっしゃい」は、大変かわいらしい歌です。しかし、詩に耳を澄ませると、猫はたくさん子を産みますので、その命を育てるというか、戦争で失われた多くの命への哀悼であった。そういう意味合いも、竹中先生の詩に込められていると思います。

戦後の大澤はラジオだけでなく、創作のジャンルを拡大して作曲・編曲・指揮を手掛け、芸術家たちと交流の輪が広がっていました。いくつか見ていただきます。

越路吹雪さんが西宮北口で歌っていらっしゃるのを聴いて、彼女のためにいち早く《ビギン・ザ・ビギン》を編曲しました。大ヒットになる何年も前の話です。越路さんが大澤家にいらして、大澤のピアノに合わせて歌のレッスンをする様子を田村孝之介画伯が描いておられます。

俳優の高島忠夫さんが関西学院で学ばれたのも、大澤の勧めによりました。日本舞踊の花柳有洸さん、バレエの貝谷八百子さんは、大澤が指揮するシンフォニック・ジャズ編成のオーケストラに合わせて踊りました。

写真の矢印の方は竹中先生。大澤は生涯で多くの詩に作曲しましたが、竹中先生の詩を取り上げた、いわゆる竹中―大澤の関西学院コンビによる作品は最も多く、三三曲もあります。その中でも東大寺のための《大佛千二百年祝典譜》は大作です。

学校制度の改革に伴って、校歌をたくさん作曲しました。また、教育の分野でも多大な足跡を残しています。女学院で学生を育て、関学の後輩も指導して、次の時代の人々を導きました。

関学と女学院に声を掛け、合同の混声合唱団を組織して自作を指揮しました。紀元二千六百年のための奉頌作品で、一九四〇年、昭和一五年作曲《海の夜明け》の録音風景です。戦後は《メサイア》の合同演奏がありました。敗戦を経験した後ですので、感動的な音楽会だったと思います。

多くの分野でかけがえのないリーダーだった大澤は、過労のため三宮で突然倒れ、帰らぬ人となりました。大澤が日記のように付けていた創作ノート。亡くなった一九五三年、昭和二八年一〇月の頁です。《ホームソング》が四九曲という中途半端な数で残っているのは、第四九週まできた時に大澤が突然亡くなったからで、図らずも遺作になり

ました。

世界に通じる芸術家が戦後の混乱期にあっけなく亡くなってしまい、私たちは残念の一言に尽きます。しかし、没後半世紀を過ぎて奇跡が起こります。きっかけは藤本賢市記者によるスクープ記事でした。二〇〇〇年、平成一二年に『神戸新聞』に大きく紹介されて大澤が知られていきます。

二〇〇四年、平成一六年には先ほど聴いていただいたCD、片山杜秀氏の監修で《神風協奏曲》がリリースされ、大ヒットとなってその年の「文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞」を受賞。平成の音楽ファンが、大澤の作品を初めて聴いて衝撃を受けました。今聴いても色あせないモダニズムです。

戦前に素晴らしい作品を作曲した日本人がいた、と空前の大澤ブームが起こりました。それと同時期に、冒頭でお話しした大澤家から三万点の寄贈がありました。前列が澄子夫人。さすが元宝塚スターで、カメラを向けるとさっとポーズ。後列の両端が大澤壽文ご夫妻でいらっしゃいます。

以上のような経緯がありまして、現在では日本を代表する音楽家が大澤の作品を絶賛しています。新国立劇場芸術監督の飯守泰次郎さん、《ピアノ協奏曲第一番》を世界初演。飯森範親（のりちか）さんはデュッセルドルフで《ピアノ協奏曲第三番》をヨーロッパ初演。ピアノは人気のアリス＝紗良・オットーさん。兵庫県立芸術文化センターの佐渡裕（ゆたか）さんは《路地よりの断章》を復活演奏。佐渡さんは「大澤さんの作品を」と関西学院交響楽団も指揮。最も多忙な指揮者の一人、山田和樹さんは《交響曲第一番》を世界初演。先ほど聴いていただいた大規模な作品です。大澤自身は作品を聴くことなく世を去り、八三年間眠っていた作品の素晴らしさにサントリーホールがどよめきました。

昨年末までは三宮の民音音楽博物館、西日本館で「大澤壽人展」が大規模に開催されました。民音の竹内益己（ますみ）さんの企画・制作、私の監修で出品数は一五〇。来館者は約二千人ありました。見学に見えた芸文センターのマエストロ、佐渡裕さんと岩村力さんです。

私は個人的に作品紹介のコンサート、「スペクタクル」をこれまで七回開くなど、大澤の音楽の普及活動を一七年続けております。とにかく今、大澤に対する評価が非常に高い。その作曲家がどんな生涯を送り、どんな作品を書いたか、皆さまに知っていただきたく、今日はお話しさせていただきました。二〇二三年は没後七〇年です。後世に伝えなければならない作曲家だと思っております。

二〇二三年五月一九日にはお配りしたチラシのように、神戸文化ホール五〇周年で大規模な「ガラ・コンサート」が山田和樹さんの指揮で開催されます。人気のマエストロが過密スケジュールの中、「大澤さんの作品なら」とおっしゃって引き受けてくださいました。

太平洋戦争の終結を祈って大澤が作曲した《ベネディクトゥス幻想曲》は、放送初演から七四年間眠っておりました。この作品の復活演奏は、私の研究者としての悲願でございました。それが来年五月に実現します。どうぞ神戸文化ホールに足を運んで、大澤の「魂の音楽」に耳を傾けてくださるようお願い申し上げます。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

＊　＊　＊　＊　＊

司会　生島先生、ありがとうございました。限られた時間の中で非常に充実した内容と、それにうまく音楽を組み合わせていただいて、とても楽しいご講演だったと思います。

せっかくの機会ですので、まだ一五分ほどお時間がありますので、質疑応答に入りたいと思います。どなたでも結構ですので、ご質問のある方は挙手をお願いします。

会場1　ご講演ありがとうございました。合唱をやっている者ですが、《ホームソング》に合唱のパートが付いているものがあると伺いました。それは混声でしょうか。男声、女声のバージョンがあるのでしょうか。今度、演奏される予定の《ベネディクトゥス幻想曲》は合唱付きということですが、他に何か大きな作品というのはありますでしょうか。

生島氏　最初のご質問ですが、《ホームソング》は四九曲全部、混声合唱でございます。まず一番をソロで歌って、その後、混声合唱が続くというかたちで放送されていました。ピアノ伴奏版がございます。

素敵な歌ばかりですので、この四九曲をぜひ出版したいと考えています。そのうち、竹中郁先生の詩によるものが七曲ございます。まず竹中―大澤コンビの歌から、と個人的に考えております。

それから二番目のご質問ですけれども、混声合唱の大作になりますと、オーケストラ作品なので、リダクションしてピアノ伴奏にする必要があります。《ベネディクトゥス幻想曲》に関しては、松尾さんと私ですでにリダクション

ができておりますので、来年お聴きになって歌ってみたいと思われたら、コンタクトしてください。よろしいでしょうか。

会場1　ありがとうございます。

司会　ありがとうございます。他に何かご質問はありませんか。

会場2　大澤壽人の作品はあれほどのレベルですから、当時のトップクラスの作品かと思います。あそこまで活躍していたのですから、その後、フランスの演奏会等で密かに再演されていたといった記録は見つかっていないのですか。

生島氏　なにぶん時代が悪うございまして。ボストンでもクーセヴィツキーが大澤先生の作品を定演で取り上げると、いう話が出ていました。実現したら大変な業績でしたが、先生はパリ行きが決まっていたので、その時できなかった。だから、いずれボストンに戻ってクーセヴィツキーに初演してもらおうと思い、パリに行った。そしてさらなる成功を収めたという経緯です。

けれども、彼の上昇に反して世界の情勢は暗くなるばかりでした。ヨーロッパに居続けると命に関わるというような時代でもありましたから、いったんは日本に帰る。これが落ち着けば自分はヨーロッパでもアメリカでも活躍できる、というおつもりでいらしたと思います。

ただ、帰国して数日で二一二六事件という頃ですから、時代に翻弄されたというか。ことに戦後は、本当に、世界に通じる才能を惜しげもなく使って、先生は人々の心の復興にあたった。この点に私は、ただ才能があるからというだけではなく、この当時の人間の生き方として非常に心打たれるものがあります。長くなりましたが、先ほどのご質問の、フランスでの再演でしたら、ちょっと状況的に無理があったのではないかと思います。

会場2　ありがとうございました。

司会　他にご質問はありませんか。

会場3　この講演に足を運んで良かったなと思っています。本当にありがとうございました。五月の《ベネディクトゥス幻想曲》も本当に楽しみにしております。少しでも大澤

さんの作品を紹介していけたらいいなと。小さなというのは語弊がありますが、いろんな曲を演奏していけたらなと思っているのですが、今出版されている楽譜はどのぐらいあるのか、神戸市混声合唱団が歌われていた楽譜などはすでに出版されているのかどうか。また、出版されていない楽譜を演奏する場合、どのような手順を踏めばよいのか、教えていただきたいと思いました。

生島氏　出版されているものについては、今日のレジュメの最後にホームページのアドレスを載せておりまして、そこを見ていただくと、刊行の時点で随時上げております。私が急がなければならないと思っているのは、《ホームソング》の出版です。皆さまのレパートリーに一番入りやすいので。

出版されていない作品の場合は、神戸女学院の図書館にご連絡くださいましたら、自筆楽譜のコピーを提供することができます。とにかく私としては楽譜の整備が頭にあります。当時のものを校訂し、浄書して、すぐに使える「演奏譜」をできる限り整えていきたいと思っています。最新情報はホームページに更新しますので、それをご覧いただければと思います。

先ほどの《桜に寄す》は、どうしても日本人ソプラノのレパートリーに入れていただきたい、世界で歌っていただきたいと思い、ピアノ伴奏版を校訂いたしました。これだけは今、ホームページからダウンロードできるようになっています。無料でございますので、どうぞご利用ください ませ。

生島氏　私からよろしいでしょうか。せっかく大澤さんご夫妻がいらしていますので、お父さまのエピソードとか、何かちょっとお話しいただけないでしょうか。それから、奥さまの佐智子さん、嫁がれた頃は壽人先生の一番上のお姉さまの、宇野文子さんがご健在でいらしたと思います。何かおっしゃったことがあると伺いましたので、その辺りのエピソードもお願いできますでしょうか。

大澤壽文氏　皆さま今日はわざわざお越しいただきまして、本当にありがとうございました。エピソードと言われましても、私も八〇を過ぎましたので、物忘れが激しくて覚えていないのですが、父は作曲の合間に西宮の浜のほうへ僕を乗せて、浜の防波堤に付着している牡蠣を食べたりして、その帰りに西宮のほうでお好み焼きを食べたり、作業の合

間に楽しんでいたみたいです。

家の中に入りましたら、いつも父の部屋からポロンポロンポロンポロンというピアノの音が四六時中鳴っておりまして、それが子どもの頃から耳についておりました。

僕が小学校六年生の時に父が亡くなって、父には大変申し訳ないのですが、それまでピアノを教わっていたのですが、父が亡くなったと同時に「やめた」と思ってやめました。今から思えば、大変残念なことをしたなと思っています。

本当に今日はどうもありがとうございました。

大澤佐智子氏　私は後から大澤家にまいりましたので、義父のことを全然知りませんけれども、結婚の時のごあいさつにお義姉さまのところに伺いましたら、「あなた、お若いんだから、今後は壽人のことをよろしく。世の中に出してちょうだい」ということを言われました。でも、何のお役にも立っておりませんけれども、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

司会　ありがとうございます。他にご質問したい方はいらっしゃいますでしょうか。よろしいでしょうか。分かりました。それでは、今日は生島先生に大変楽しい講演をしていただきました。また、大澤ご夫妻にもいろいろ貴重なお話を伺いました。どうもありがとうございました。

それでは、第54回関西学院史研究会、これでお開きとさせていただきます。どうもありがとうございました。

（終了）